

第1講:オマーンに住み着いた人々

わたしの知る限り、オマーンは、神の他の国と同様に、人の定住地であり、特にアラビア半島は自然の立地に関しては人の密集地であり、それ故に神は地上に人の集団を、特に又セム人の集団を創造して以来、この地を全般的な預言の崇高な地としたのである。神がこの我々の歴史書に対し我々に課したのは、時が経過したすべての集団の中でオマーンに住んだ人々について記すことであった。読者が、祖国に定住し、この地でそれ以前は或る時期、気楽に生活を享受出来なかった集団について調べてみる興味を持てるように。以前はそこでは生活の糧もなく、物づくりから創りだされるものも何も無かった。但し彼らの手元にあったのは、少なくとも考える余地と先人からの教訓であった。それ故に偉大なる神は存在について考えることをお命じになった。その中身は、神の創造したものと不可思議なものであった。故に読者はそれに対して沈黙をまもるのをよしとすべきである。

知ってほしいのは、古代にオマーンにシムール人が居て、彼らが銅を取り出した最初の人々であり、取り出した最初の銅がオマーンから世界に向けて出されたということである。彼らはオマーンをマガーンの地と名付けた。それは紀元前 4000 年或いはそれ以前のことであったと言うことである。また知ってほしい、オマーンに定住した集団の中には、イギリスの歴史家バートラム・トーマスと紀元1世紀の古代の歴史家ピリーニーが述べている様に、カルデア人も居て、彼らはオマーンをイブリータと名づけていた。その後ペルシャ人が来、アード族が来て、オマーン・ブン・カフターンが彼らを追放するまでオマーンに住んでいた。彼は当時兄弟のヤアリブ・ブン・カフターンから(命じられ)オマーンを統治していた。ペルシャ人達の住まいは、アフカーフ砂漠として知られる砂漠にあった。それは間違いなくオマーンの一部であった。

フェニキア人もオマーンに住んでいて、スールが彼らの街であったが、そこからシリアへと出て行き、彼らのオマーンにおけるスールの代わりに、シリアのスールとして知られる街を建てた。しかし誰が彼らを追い出したのか知らない。おそらくオマーン・ブン・カフターンであろう。「選書」に述べられているが、それに依ると、マーリク・ブン・ヒムヤルがオマーンの王であった。次いで息子のカダーア、その息子のイルハーフ、次いでその息子のマーリクであったが、ヒムヤルのサクサクが彼らと戦い彼らをオマーンから追放した。

何人かの昔の歴史家たちが述べているのは、「アッシリア人がオマーンを支配したことがあったが、それは彼らの支配の時代であったが、アッシリアのファラースが出て行って、代わって後期バビロニアがその位置を占めた。彼らによりオマーンは力を増し、繁栄し、商業が活発化した。時は、オマーンに関心をもっていた第2次バビロニア帝国の時代で、長期間にわたった。それは紀元前7世紀のことである。その後ペルシャ王の一人キュロスがやって来て、オマーンからバビロニア人を一掃した。アラビア湾とオマーン海岸の繁栄していた諸港を支配する、という彼の夢の実現を可能にし、オマーンからバビロニア人を完全に除き、その後ペルシャ人がバビロニア人の地位を占めたのである。

これまで述べられたことから、明らかになった事は、最初にオマーンを領したの、シムール人であり、彼らが、一般的に銅が存在する様になる前に、銅を採掘した最初の人々であって、その銅から花瓶をつくり、また彼らこそがオマーンをマガーンの国すなわち銅の国と名付けたのであった。それは紀元前 4000 年のことであった。この事は、彼らがオマーンの基礎を作り、神が出て行く許しを与えるまで、オマーンで諸活動の先頭に立ってきたことを示している。

その後、カルデア人が来て、オマーンに居を構え、そこで長い年月住み着いて、オマーンをイブリータと名づけた。

それから前期ペルシャ人がオマーンに来て、住み7世紀以上の年月にわたり支配し続けた。この上記の期間を嬉々として過ごした後、神の望みにより除かれた。アード族が続々とやって来た。つまり彼らはアラビア半島から出て、混み合った絶え間ない波が押し寄せるようであった。それからアフカーフが彼らの手綱の中心となり、コーランが示しているように、彼らの中の無思慮な者達の場所となった。オマーンにおけるアード族が手にしたものは、最終裁定(拒否と決着)であり、又戦闘に突入り勝利する事と傲慢であった。遂には、不正が増大し、彼ら調停では感情が更に誇張され、神の地で大きな暴挙に至った。そのため、全てを自らの手にする神は、彼らに対する復讐を望み、彼らに対し懲罰を送り、神の怒りが彼らを服従させた、コーランの中で神が彼らについて語っている通り。

その後、一人の王、オマーン・ブン・シバーク・フィンジュダイヒーが来て、オマーンを統治し、アード族の残留者を追放し、彼と彼の部下達が長い間オマーンで生活していた。それからオマーン・ブン・カフターンが来て、兄のヤアリブ・ブン・カフターンを通じオマーンを領有した。知っての通り、最初にオマーンに住んだ人は、オマーン・ヤフサー・ブン・イブラヒームであり、オマーン・ブン・イブラヒームとも、又オマーン・ブン・サバア・ブン・イブラヒームとも言われ、最初にオマーンを建国した人である、これが最も正しそうである。「選書」の91ページに「ナセル・ブン・アルアズドの子孫は、ペルシャの地では、ワジュワ・ブン・シャジャールであって、ジャルンディ・ブン・カラカラの氏族であった。」とある。私が述べたのは、ジャルンディー・ブン・カラカラの氏族は、マウーラ・イブン・シャムスの氏族であって、マーリク・ブン・ファハムの子孫であり、オマーンではカフターン系アラブが、長い間住んでいた。そしてオマーンは、現在に至

る全ての時代で、その重要性を持つ独立首長国である。

ハドラーミーが、その講義で述べている：

「イムラーン・ブン・アマルが彼の一族と別れてオマーンに関心を寄せた。その時既にオマーンに居たタムス族とジュダイス族の者たちは滅亡していて、イムラーンとその子孫がオマーンに居を構え入植していた。彼らがオマーンのアズド族である。このことは、タムス族とジュダイス族こそがアズド族の前からのオマーンの民であったことを示している。誰が彼らをオマーンから追放したかは記録に無い。ペルシャ人は、オマーンでは最後に到来した人々でマーリク・イブヌ・ファハムが追放している。このことは、ペルシャ人がオマーンからアズド族を追放しその後でマーリク・イブヌ・ファハム が来たことを示すものである。このマーリクがオマーンから追い出すまでは、ペルシャ人がそこに根を下ろしていたことになる。」

「日々は我(アッラー)が人々の間で流転させるものである」。明らかになったのは、オマーンに、カフターン人以前に定住していた人々は、少なくとも10以上で、それは、シュメール人、カルデニア人、アード人、フェニキア人、アッシリア人、バビロニア人、前期ペルシャ人、ファンジャディヒー人、カフターン人、サバア人、タスム人、ジュダイス人、前期アズド人、後期ペルシャ人、後期アズド人であり、ファンジャディヒー人の王がオマーン・イブン・シバークであった、ということである。

サバア人とは、サバア・ブン・ヤフサーン・ブン・イブラヒーム・アルハリール家(彼に祝福と平安あれ)のことである。前期アズド人とは、イムラーン・ブン・アマル家のことである。後期ペルシャ人とは、マラージバ族とその支援者のことである。後期アズド人とは、マーリク・ブン・ファハムとその同伴者達であった。マーリク・ブン・ファハムが ペルシャ戦時にマラージバ族に遭遇する度に、自分の兵士たちに言った言葉が、アズド族が2回オマーンを支配していたことを証明している。その時の彼の言い方は、彼らを煽動するようなものであった：

「諸君の気高い祖先を大事にし、そのすばらしい業績を守りぬけ！」彼の言ったことは祖先の業績についてで、祖先がオマーンで手にした実績のことを示しており、それを守れと煽動しているのである。その業績とは何かといえば、彼らの祖先が、このペルシャ系マラージバ族の前には、代々のオマーンの王であったことで、その意味は、もし汝達、ペルシャの一族よ、オマーンを汝たちの王に供するというのであれば、我々もまた同じ(様に自分達の為に供するの)である。また汝達が、我々がオマーンに居たことと同様に、オマーンに居たことを理由に我々と共生するか、さもなければ我々が戦争を呼び掛けているという口実でお互いが戦うかである。多分これはマーリク・ブン・ファハムがそこ(オマーン)での進軍に関して、検討を必要とした最初のことであった。我々が述べたこの事は、マーリク・ブン・ファハムの言ったことの中で記されている事でもある。

マーリク・ブ・ファハムは、神の預言者ムーサー(モーゼ)・ブン・イムラーンの時代にオマーンに居た。彼こそが全ての舟をカブクで奪取した人であり、それが、国から国への移動を望むときの彼のいつものやり方であり、オマーン海を通る舟を奪取するよう命じたのである。当時カルファートはオマーン的首都で、彼がそこに殆ど居住していた事は、侵入者に対する堅牢さ故であった。そこは、侵入者には狭い山岳の地域であり、そこからオマーンへの侵入が困難な所であった。人の集団が海岸に山羊の群れのように見えていた。彼らは自分達の舟を取られて、どこへ向かったらよいか分からなくなっている人々であった。これは神のお望みでなく、王たちの仕業であった、特にイスラーム以前の時代には。

マーリクは、この(上述の様な)タイプの人で、カルハートは海岸の砦であった。この砦について、ヤークート・アルハムワーが言っていた、「海岸の町へは、殆どのインド船がドック入りしていた」と。私が言ったのは、「マーリクがこの街からオマーン海を通る舟を取押さえていた。故にそこに錨を下ろしていたのである」と。またヤークートは言っていた、「この街は今やこの国の小さな港町であり、オマーンの行政区の中で最も繁栄し人の多い地域の典型になっている。もしマーリク・ブン・ファハムがここに住み着き、ここで守りを固めていたことが知られれば、ここが最も古い首都の一つになっていたであろう」と。ヤークートは、この町を普通に考えられているものでない新しい文明の地と考えた。

マスウーディーの「黄金の草原」によると、マーリクはジャフナ・ブン・アマル・ブン・アーミル・マジイキーヤの一族とともにイェメンから出て、ジャフナの一族はシリヤへ行き、マーリクは別れてイラクへ向かって、ムダル・ブン・ニザール族を12年間支配した。この事は、その当時イラクは、ムダル族(のもの)であって、そこにマーリクがそこに居た時もそうであったことを示す。その事は、彼らの中にある部族のトラブルに依るものであった。彼らの中の部族トラブルを押し退ける為に、マーリク・ブン・ファハムを彼らが王にした。また伝えている、彼の後、彼の息子のジュジャイマが統治し、ジュジャイマの王権は、シリヤ高地へまたユーフラテスを通してローマへと伸びていった。彼の家は、ハーヌーカとカルキーシアの間にあるマディーラとして知られる場所にあった。又伝えている、ジュジャイマは、小君主王達の時代に95年間、王であった。アズダシール・バービク王とサーブール・アッジュヌード・ブン・アズダシールの時は23年間、その王位は118年間であった。

アルオウタビーがカルビー族の系統に関して述べているのは、「アズド族出身で最初にオマーンに達したのは、マ

ーリク・ブン・ファハム・ブン・ガーニム・ブン・デウス・ブン・アドナーン ブン・アブドラー・ブン・ザハラーン・ブン・カアブ・ブン・アルハリス・ブン・アブドラー・ブン ナセル・ブン・アルアズドであった」。私が述べたのは、その通りである。後期アズド族の中で最初にオマーンに達した人こそ上記のマーリクであった。その理由は(先ず)イエメンから放浪して来たアズド族の中でこの地に降り立った者が滞在していた事、そしてマーリクがイラクへ(と子供達と別れて)出発し、そこでマダル族と隣に留まっていた事、更にその地で人々が彼を王とした事をアラブ諸国は知っていたのであった。そして(王として推戴された)この事は、彼ら(イラクのマダル族)の誰かが他者にふてぶてしくなるが故に、彼らの中の誰かが他者を支配することを拒んだ時のことであった。それからマーリクは、彼を自分達の王にした人々と共に(依拠する)場を見ることはなかった。つまりこの事が故にマダルは彼に対して強味を持っていたのであった。彼は、支配力のある王では無かった、その理由は、王という者は、統治する者への力が無ければ、彼の王権は裸で返却を求められるからである。それが故にマーリク・ブン・ファハムは、決意を変えオマーンに行き、そこでペルシャと角を突き合わせ、そこで彼は、(ペルシャが)力づくで得たものを、彼の力を持って手に入れようとした。オマーンにはかつてアズド族がいたが、出て行った後だった。そこへマーリクが戻り、可能ならば支配権を取り戻し、その地で自由気ままな生活をしようとした。

その中のある人が言っている、「(イエメンの)マアイン国はイラクのアマレクの出自であり、又言われている事には、彼らはアラム人の出で、オマーンに領主権を伸ばし、それからハムラビ人が来て、その後カフターン系のサバア・ブン・ヒムヤル家出で、ヒムヤル人の国を構成したサバア人が来て、その後、フェニキア人が続き、アッカード人、カルデニア人が来たが、彼らはアラビア半島の民である。

半島概況に関してある者達は、(上記の)彼らの支配権はアラビア半島全体に対するものから、ペルシャ湾、地中海へと広がった、と述べている。又言うには、その国は紀元前800年にあったと、またイエメンのタバーピア時代は紀元前900年であったとのことである。また言う、タバーピアに関しては次の条件が付けられている。即ち、王はイエメンと共にハドラマウト、シフルを併合した者である。さもなければ王ではなく、その者がトゥップア(前述のタバーピアの語源)であると言われている。又言う、その期間は紀元後275年に始まっている。(著者である)私が述べたのは、この事は、或る者が最初に言った、タバーピア時代は紀元前900年(にあった)と違っている、ということである。

又或る者は次の様に言った。即ち、ヒムヤルの諸王の期間は、2000年以上に達していて、アッシリア人が(祖先)アシュウルにまで遡るのは、フェニキア人はフェニクに遡ると同様である。真実は、この集団が生きた期間を調べることである。彼らの統治者を調べることは、この時代の民にとっては難しい。つまり記録が存在しないためである。特にアラブに関しては。言われてきたことは、預言の伝承やその言い伝えからであろうと、經典の民の言葉またその中に書かれたものからであろうと、無視できるものではない。

(イエメンの)マリブ地方のダム破壊は、紀元前3世紀とも5世紀とも6世紀とも言われている。このことからマーリク・ブン・ファハムがオマーンに出たこと、その期間がどの位かが知られる。歴史学者というものは、史実を書き下す人たちでもなく、事件の類を書く人たちでもなく、物事をその前触れから追跡して結論を出す人たちであり、行為の進捗から状況を理解し、史実などから問題の判断を引き出す人達である。

オマーン史においては、真実と虚偽の下、祖国で過ぎ去った時期に起こった幾つかの重要なことがあり、それを貴方は、この歴史の中で見ていく事になるであろう。

これが、繁栄と美しさのドバイであり、外国人が溢れている。外国人は資産持ちで、国の資源を手にし、公は言うまでもなく、民間の状態にも浸透している。神よ、あなたは、我々が言う前に何を言うかをご存知である。虚偽の宗教から我々の宗教をお守りください。我々の敵から祖国をお守りください。正に貴方は寛大で慈悲深いお方。